

【個人研究】

## 非行性の認定（ ）補遺 その1 心理検査による非行性のアセスメント：MMPI

進 藤 眸\*

### Studies on Differentiating Delinquency( 7th Report ): Supplementary Reports Part 1 Assessment of Delinquency with Psychological Tests : the MMPI

Hitomi SHINDO

This paper aims to compensate for the leeway in the existing studies on the assessment of delinquency with the MMPI in recent years in Japan. Both the Japanese and English literatures on the assessment of delinquency with the MMPI, and particularly English literatures published since 1990, were reviewed from the viewpoint of the analyses of high point codes and profile patterns, development of delinquency scales, and application of factor analysis methods.

Based on the several findings obtained by reviewing the above-mentioned literatures, it could be concluded that further studies on the assessment of delinquency with the MMPI, should not be carried out before a thorough discussion on the following four methodological problems:

- a. eliminating biases in collecting and evaluating data concerning delinquency;
- b. assuming that there exist various types of delinquencies, such as sexual delinquency and violent delinquency;
- c. assuming that delinquency and mental disorder are arranged psychopathologically on the same continuum; and
- d. remedying a deficiency of the MMPI by conducting other psychological tests and/or social investigations.

**Key words:** MMPI, delinquency, high point code, delinquency scale, profile pattern, factor analysis method  
MMPI、非行性、高点コード、非行性尺度、プロフィール型、因子分析法

#### 1 問題の提起

MMPI ( Minnesota Multiphasic Personality Inventory : ミネソタ多面人格目録 ) は、少年

の非行性のアセスメントにおいて最も広く使用されている心理検査である。初期の研究において、Hathaway, S. R., et al. ( 1957 ) が、尺度4 ( Pd )、8 ( Sc ) および9 ( Ma ) の得点の高さが非行危険性の高さを表すとして、これらを興奮尺度 ( excitatory scales )、また、尺度

\* しんどう ひとみ 文教大学人間科学部臨床心理学科

0 (Si)、2 (D) および5 (Mf) の得点の高さが非行危険性の低さを表すとして、これらを抑制尺度 (inhibitory scales) と、それぞれ名づけたことは、つとに有名である。

彼らは、同じ論文で、さらに、MMPIの尺度4、8または9が最も上昇し、Tスコアが70を越えている場合には、3、4年以内に非行が発現する危険性は26-32パーセントに達する、と報告した。

Päna, L. M., et al. (1996ab.) は、少年院在院の162人の男子少年のサンプルにMMPIの青年版 (MMPI - A : Butcher, J. N., et al. (1992ab.)) の作成による。) を実施し、このグループが、ノーマティブ・グループよりも統計的にも臨床的にも有意に、尺度9 (Ma)、4 (Pd) および6 (Pa) において上昇し、尺度5 (Mf) において下降することを見いだした。

このように、MMPIの臨床尺度のコード型に着目した研究は、枚挙にいとまがないが、Hathaway, S. R., et al. (1963) は、「非行性を分析し予測するに当たって、平均尺度得点の差を見ても、あまり役には立たない」と主張し、高点コードの分析を推奨した。

高点コードの分析を、MMPIによる非行性のアセスメントに関する研究の主流、すなわち、「第一の流れ」とすれば、非行性尺度の開発は、「第二の流れ」としてとらえることができる。Hathaway, S. R., et al. (1957) は、あらかじめMMPIを実施しておき、4年間の追跡調査期間中に非行に陥った少年とそうでない少年をサンプルとして項目間で二重交差妥当化法 (double cross validation) を実施し、非行性尺度 (delinquency scale) として33項目を抽出した。これにヒントを得て、我が国においても、阿部満州ほか (1967, 1969) がMMPI - Dテストを開発した。

Clark, J. H. (1948) が作成した再犯尺度 (recidivism scale : Rc) も、非行性尺度の一種であるが、この尺度は、この種の尺度の多くがそうであったように、統計的な手続が不十分であったため、その後、ほとんど活用されないまま推移している。

Hathaway, S. R., et al. (1957) は、パーソナリティの変数ないし類型が非行傾性 (delinquency proneness) という意味において非行の発現と結びつくと思えるに足る根拠があると述べているが、彼らが他の文献 (Hathaway, S. R., et al. (1963)) で指摘しているように、この非行傾性を「弱から強への連続性をもった、つまり単一の連続変数として非行の蓋然性に寄与する多くの個人・環境因子の平均的複合」ととらえると、彼らが一度否定した「プロフィールの分析」を重視する立場がクローズアップされる。ここに、「第三の流れ」を伏流としてとらえることができるが、個々のプロフィールの「読み」を厳密に実施することが要請される。

非行少年の平均尺度得点が算出され、非非行少年のそれと比較する研究が数多く発表されてきたが、それらは、あくまでも個々の非行少年の、非行性とかかわるパーソナリティの特徴ないし類型を理解するのに役立つものである。

プロフィールの「読み」が正確にできるようになるためには、手引を参照しつつ、代表的なプロフィールを数多く読むことである。その意味で、プロフィール分析の手引として、Hathaway, S. R., et al. (1961) が『少年版MMPIアトラス』、小野直広ほか (1970) がその日本版を作成したことは、特筆に値する。

最後に、「第四の流れ」として「因子分析法の適用」も見落とすことができない。これは、「第三の流れ」の延長線上にあるとも解されるが、統計学とコンピュータの発達によって促進されたものである。Hathaway, S. R., et al. がMMPIによる非行少年の研究を開始した1940年代から1960年代までの英語圏の文献では、Wheeler, W. M., et al. (1951) をはじめ同時期に数人が全尺度、Comrey, A. L. (1958) がPd尺度について、それぞれ研究したものがあがるが、いずれも精神病患者を対象としている。

この期間に、非行少年を対象とし、MMPIの尺度間で因子分析をした研究は、おそらく、我が国において、著者ほか (1969, 1972) が実

施したものが最初であろう。

以上、見てきたように、MMPIによる非行性のアセスメントに関する研究は、四つの流れとしてとらえることができ、心理検査による研究としては、世界で最も文献数の多い分野である。

しかしながら、我が国においては、評価できる研究は、1980年代前半までで、その後20有余年にわたって不毛の時代が続いている。

このような研究の停滞を取り戻すため、非行臨床家として、われわれが、これまで何をし、どのような成果を上げてきたかを回顧するとともに、欧米における最近の研究動向を概観することによって、研究の課題と方法論を探求することは、有意義である。

## 2 研究の目的

この研究の目的は、近年、我が国においてMMPIによる非行性のアセスメントに関する研究が停滞している現況にかんがみ、以下の二つの作業を通して、今後、どのような研究課題を取り上げるべきか、そして、そのために検討しておくべき方法論上の問題は何かを明らかにすることである。

(1) この分野における内外の研究を、四つの研究の流れ、すなわち、a. 高点コードの分析、b. 非行性尺度の開発、c. プロフィール型の分析、d. 因子分析法の適用、から概観する。

(2) 欧米における最近の研究を概観し、研究の動向を把握する。

## 3 研究の方法

研究の目的を達成するための方法としては、MMPIによる非行性のアセスメントに関する文献を可能な限り収集し、研究の目的に掲げた、この分野における四つの研究の流れに沿って整理した上で、概観する、いわゆる文献法を採用する。

文献の範囲は、原則として学術雑誌、研究

紀要等に掲載されたものとするが、必要に応じ、単行本、学会発表抄録等に掲載されたものを取り上げる。

日本語の文献の検索に当たっては、国立情報学研究所のCiNii( Citation information by NII )を利用する。2005年8月1日現在で、MMPIと非行性の2条件を満たす文献は、2編にすぎないので、別途、収集していたストックを利用する。

一方、欧米語の文献の検索に当たっては、既に紹介したように、心理学関係の欧米文献検索：PsycINFO ( EBSCOhost )を利用する。2005年8月1日現在で、MMPIとdelinquencyの2条件を満たす文献は、503編である。

研究の目的に掲載した(2)の作業を実施するため、上述の手続によって入手可能な文献のうち、1990年以降に発表されたものに限定し、さらに、(1) 高点コードの分析についてはhigh point、(2) 非行性尺度の開発についてはdelinquency scale、(3) プロフィール型の分析についてはprofile pattern、(4) 因子分析法の適用についてはfactor analysisを、それぞれ追加して検索する。

なお、短期間に多くの文献を収集せざるを得ず、また、我が国では入手できない文献も相当数に上ったため、次善の策としてPsycINFO ( EBSCOhost )に掲載されたabstractのみ参照したものもある ( abstractのみを参照した場合および他の文献から引用した場合には、「著者名 ( 発表年 )」の発表年のあとに「ab.」を記入し、区別する。 )。

## 4 結果と考察

### (1) 高点コードの分析

高点コードの分析の研究は、Hathaway, S. R., et al. ( 1953ab. ) に始まる。彼らは、プロフィール・コードと非行率とを組み合わせ、MMPIのプロフィールにどのような特徴があれば、非行が発現しやすいかを数量的にとらえようとした。彼らがこの分析のサンプルにしたのは、アメリカ合衆国ミネソタ州ミネア

ボリス市にある公立学校9年生のうち、テスト結果に妥当性のあった3,779人(男子1,834人、女子1,945人)であった。

彼らは、MMPIを実施したあと、2年間、追跡調査を実施し、警察、少年裁判所等の記録に基づき、非行性を0から4までに評定し、1以上と評定されたもの、すなわち、単一の交通犯罪よりは重い非行を示す記録をもつ少年を「非行少年」と定義し、非行少年群と非非行少年群を設定したのち、両群について、単独高点コード(一つの尺度にのみTスコア55以上の高点を示すもの)および2高点コード(二つの高点を示す尺度の組み合わせ)を調べた。

その結果、彼らは、(1)2高点コードのいずれも4(Pa)、8(Sc)または9(Ma)(すなわち、48、84、49、94、89、98)である場合には、平均非行率は33パーセントである、(2)2高点コードの一つが0(Si)、2(D)または5(Mf)である場合には、17パーセントである、(3)他のコード全部の平均は20パーセントである、ことを見だし、特に、4が3(Hy)、8、特に9と結びつくと、非行率が上昇するが、コード型41(Pd・Hs)、47(Pd・Pt)、特に42(Pd・D)では、少年一般に期待されている非行率よりも低下する、と指摘した。

Hathaway, S. R., et al. (1957)は、その後、更に2年間、追跡調査を実施した結果に基づき、2度目の非行性評定を行い、合計点で、先の研究と同様、1以上と評定された少年を「非行少年」と定義し、分析を実施した。その結果、彼らは、4(Pd)、8(Sc)および9(Ma)における得点の上昇は非行率の高さに関連があり、一方、尺度2(D)、5(Mf)および0(Si)における得点の上昇は非行率の低さに関連があることを見いだした。

研究の規模の大きさもさることながら、Hathaway, S. R., et al.の研究の特色は、postdiction(事後予測)を排除しようとした研究姿勢にあると言ってよい。彼らは、「非行を犯し、非行少年になった子どものパーソナリティは、その事実によって変えられる」と考え、あえ

て非行の発現前にテストを実施し、その後、非行を犯した者とそうでない者を分けて比較するという研究方法(prediction(事前予測))を採用した。

我が国では、小野直広ほか(1968a, 1968b, 1968c, 1969)および著者ほか(1970b)が、我が国の一般少年556人および非行少年672人を対象に、プロフィール・コード型と行動傾向、パーソナリティ特性等との対応性を検討し、MMPIの解釈の法則性を探求した。われわれは、一般群(ND)と非行群(D)を更に性別によって分け、各群を通じて10ケース以上の出現度数を示したコード型を取り上げ、コード型が各群の特徴を分析・記述する上でどの程度役立つかを検討した。

**Table 1 Frequency( in Percentage) of the High Point Codes for Non-Delinquents (ND) and Delinquents(D)(N = 10)**

Code Class	Boys		Girls	
	ND	D	ND	D
13.31	7.2	5.9	6.2	1.6
14.41	0.4	3.8	0.5	3.1
24.42	-	5.9	-	4.9
20.02	2.9	0.7	2.1	1.6
3-	4.3	0.3	1.0	1.6
34.43	4.7	11.1	2.6	6.3
39.93	1.8	2.4	2.1	1.6
4-	0.7	4.9	1.5	7.8
45.54	-	3.5	2.1	12.5
46.64	1.1	6.3	1.0	3.1
47.74	0.4	4.2	0.5	3.1
49.94	1.8	5.9	3.6	14.1
40.04	0.7	3.8	1.5	1.6
5-	1.8	1.0	10.8	9.4
59.95	2.5	2.4	3.1	4.7
50.05	2.9	0.3	1.0	1.6
6-	1.1	2.4	1.5	1.6
69.96	4.7	2.4	2.1	1.6
79.97	1.1	2.1	1.5	-
70.07	2.5	0.3	1.0	-
89.98	2.2	0.7	3.6	1.6
9-	6.1	2.1	5.2	1.6
90.09	2.9	1.0	3.1	-
0-	3.6	2.4	3.6	1.6

その結果、われわれは、Table 1に示したように、43、46、4-、42および49の各コード型がよく現れることを見いだした。

われわれの研究は、この研究をベースとして『日本版青少年編 MMPIアトラス』を刊行したことから分かるように、警察、家庭裁判所等の公的記録だけでなく、一般群については、研究者たちが、本人をよく知っている職場の上司、学校の担任教員などから直接、聴取し、社会資料として活用した点に特徴がある。

### (2) 非行性尺度の開発

MMPIの項目を利用して最初に非行性尺度を作成したのも、Hathaway, S. R., et al. (1957)である。ただ、その作成手続については、二重交差妥当化法を実施したとしか説明されていない。Hathaway, S. R., et al. (1963)は、6年後にDe尺度を発表したが、「精練版」と称しつつも、やはり作成手続を明らかにせず、項目数を33項目から30項目に減らしたものの、一致する項目は15項目にすぎない上に、彼らをして「De尺度は、識別力がなく、予測に関してはコードが提供してくれるほどの分析的情報を準備しない」とまで言わしめたほどである。

我が国では、阿部満州ほか(1967, 1968)が、Hathaway, S.R., et al.の影響を受け、MMPI - Dテストを開発したが、Hathaway, S.R., et al.の非行性尺度は、(1)非行性の進んでいない者を対象にしているため、識別力に劣っている、また、(2)地域の文化差も考慮に入れる必要がある、と考え、少年院に収容された非行少年を非行群、高校生・大学生を一般群とし、東北、関東および関西の各地区でデータを収集し、両群の間で有意差のあった46項目を抽出した。ちなみに、MMPI - Dテストは、これらの46項目に妥当性尺度の一つとされているK尺度の30項目を加え合計73項目(重複項目が三つある。)から構成されている。

非行性尺度に近いものとして再犯尺度があるが、これを最初に手掛けたのは、Clark, J. H. (1948)である。しかし、彼が作成した再

犯尺度は、当時の統計学の水準から見てやむを得ない事情があったにせよ、再犯と言っても、無許可離隊という軍隊の規則違反のそれで、およそ一般犯罪におけるものとはほど遠く、サンプル数も再犯者群、非再犯者群ともに50人と少なく、また、両群の間で10以上の開きがある項目をもって再犯識別項目に選定するなど、ずさんなものである。

### (3) プロフィール型の分析

Hathaway, S. R., et al.は、MMPIによる非行性の予測を、非行少年群と非非行少年群を設定した上で、尺度得点の平均、プロフィール・コード型および非行性尺度の三分野から研究し、その成果を、1951年、1953年、1957年と、次々と発表した。コード型の分析に当たっては、平均尺度得点と高点コードについての知識を欠くことができないが、これら2点については、既にかんがりの部分について紹介したので、割愛する。

Mack, J. L. (1969)は、80人の再犯者と68人のパロール成功者のMMPIを平均尺度得点、異常なプロフィールの出現頻度、コード型の比率および臨床尺度の平均順位を分析し、再犯者と非再犯者を識別しようとしたが、結論として言えることは、(1)MMPIのみを用いて、比較的同質の非行群内の再犯者を識別することはできない、(2)MMPIの使用は、グループ内のわずかな差異を探索することに限定すべきである、(3)再犯者を識別するためには、MMPIと生育史の情報を合わせて使用する研究を実施する必要がある、と報告した。

我が国では、遠藤辰雄ほか(1960)が、性別および非行・無非行の別に4群を設定し、各群を比較し、(1)本来、成人用であるMMPIは、少年の非行性の識別にも適用することができる、(2)妥当性尺度、特にFにおける偏倚の有無が、重要な識別手段の一つになる、(3)臨床尺度においては、Pd、Pa、Ma、Hs、Mfがこの順序で識別力を有する、(4)全般に、非行少年のほうが非行のない少年に比して高い得点をとる傾向があり、性格の不適應度が大きい、(5)個々のプロフィール

についての診断・鑑別に当たっては、Pd、Pa、Ptのいずれか、またはいくつかが高得点を示すことが、非行性の識別指標になる、と報告した。

安香宏ほか(1962)は、非行群603人、無非行群1,077人を、性別、年少・年長によって8群に分けて群間比較を実施し、(1)妥当性を欠く資料は、男女ともに非行群において顕著で、しかも、それはほとんどFの偏倚によるものである、(2)全体的に見ると、非行群ではPd、Pa、Maが無非行群に比して明らかに高い値を示し、逆に、Si、Hyが低い値をとる、(3)非行性尺度(Hathaway, S. R., et al. (1957)のDq)および再犯尺度(Clark, J. H. (1948)のRc)において、非行群は有意に高い値をとる、と報告した。

遠山敏(1962)は、非行少年85人、高校生90人、受刑者82人、一般成人72人を対象として群間比較を実施し、非行少年と受刑者の両群、高校生と一般成人の両群がともに共通した特性を示したが、犯罪者群と非犯罪者群とでは、はっきりとした差が見られ、犯罪者群はF、Pd、Pa、Ma、非犯罪者群はPt、Hyにおいて、それぞれ有意に高い値をとる、と報告した。

大崎サチエ(1970)は、少年院生(男子654人、女子88人)と高校生(男子186人、女子236人)の平均尺度得点を比較し、少年院生のほうが、男子ではPd、Pa、Pt、ScおよびMa、女子ではF、D、Pd、PaおよびScにおいて、それぞれ有意に高い値をとる、と報告した。

小野直広(1980, 1981)は、我が国の非行少年について、10年間の間隔において2度、MMPIを実施し、(1)最高点コードとしては、4(Pd)だけが前回より高率で、また、9(Ma)だけが低率である、(2)2高点コードの出現率では、4-型と41型がともに前回より高く、低いものはなかった、(3)平均MMPIプロフィールは'43-Xと記号化される。しかし、もし、ミネソタの基準を適用すれば、それは42'8763150-Xと変換され、全サンプルの43パー

セントを占める、と報告した。

なお、小野直広は、同時に国際比較をし、1953年のミネソタ調査では、非行少年の典型的なコード型として49、46および48の各型が挙げられたが、1979年の我が国での調査では、43、46、4-、42および49の各型が多く出現する、と報告した。

非行少年のプロフィールには彼我の文化の差が当然に投射されるので、そのことを考慮に入れ、国際比較の結果を利用していく必要があるが、我が国の非行少年において43型、すなわち、PdとHyの組み合わせが多いことは、示唆に富んでいる。著者は、Hyに含まれる日本人特有の「甘え」が何らかの形で非行にかかわっているのではないかと考えているが、この点の検討は、今後の課題として残される。

#### (4) 因子分析法の適用

Comrey, A. L. (1958)は、非行発生率と最も関連性が高いとされるPd尺度の50項目に着目し、これに年齢、性別および入院の変数を追加して因子分析を実施し、神経症傾向、パラノイア、精神病質的人格、内気、非行性、多幸症、反社会的行動および家族間不和の8因子を抽出したが、先に述べたように、分析対象者は、非行少年でなく、精神障害者である。

著者ほか(1969, 1970a, 1972)は、非行少年120人を対象に尺度間で因子分析を実施し、5因子を抽出したのち、因子ごとに、因子得点の高い上位群について事例を検討し、テスト構造性と非行性との関連について、次のような結果を得た。

(1) 第 因子(Hs、D、Hy、Pd)は、神経症傾向を示し、非行は、逃避と衝動とに結びつき、はっきりとした人格を背景としている。

(2) 第 因子(L、K(以上、正極)、Mf、Pa、Ma(以上、負極))は、軽そう性を示し、非行は、しつけ不全による粗野さ、落ち着きのなさに関与し、人身攻撃の形をとる。

(3) 第 因子 (D, Pt, Si) は、内向性を示し、非行は、攻撃性の欠如と関連し、財物系に傾く。

(4) 第 因子 (F, Pa, Pt, Sc, Ma (以上、負極)) は、精神病傾向を示し、非行は、対人接触の少なさとかわる。

(5) 第 因子 (K, Pd, Pt (以上、負極)) は、情緒不安定を示し、非行は、快楽を追求する遊び型をとりやすい。

このような分析を通して、著者ほかは、特に、(1) 第 因子ないし第 因子が非行性を測定するテスト構造的をもつ、(2) 第 因子がヒステリー性精神病質傾向の識別に有効である、(3) 第 因子と第 因子が攻撃性に関連している、(4) テストそれ自体に神経症または精神病を識別する構造的がある、と報告した。

著者ほかの研究は、テストの構造的の分析にとどまらず、事例分析を通して、非行の発現機制にまで接近し、MMPIによる非行性のアセスメントに関する研究に一つの方向性を示したものである。

(5) 欧米における最近の研究動向

1990年以降に発表された研究のうち、「研究の方法」で挙げた条件を満たす論文は、高点コードの分析では3編、非行性尺度の開発では0編、プロフィール型の分析では2編、因子分析法の適用では10編、合計15編である。

高点コードの分析では、Morton, T. L., et al. (2002a) は、男子非行少年のMMPI - 青年版 (MMPI - A) では、(1) 5 (Mf) の低点が最も頻繁に見られ、次いで、6 (Pa) と4 (Pd) の得点が上昇する、(2) 尺度を組み合わせると、高い感受性 (sensitivity) と特殊性 (specificity) をもって、非行少年サンプルとノーマティブ・サンプルを識別することができる、と報告した。

プロフィール型の分析では、Shealy, L., et al. (1991ab.) は、児童を対象とする性犯罪受刑者を対象にクラスター・アナリシスを実施した結果に基づき、四つのプロフィールを識別し、うち、二つは正常領域内の下位グルー

プ、他の二つは、怒りと攻撃を示すものと重篤な精神病理を示すものに分かれることを見だし、この種の性犯罪受刑者には等質の下位グループが存在する、と報告した。

因子分析による接近では、Archer, R. P., et al. (2002) は、MMPI - Aの構造簡約化を展開するため、このテストの89個の尺度および下位尺度の解釈を単純化する手段として、八つの一次因子次元に関する諸発見を組み立てる作業の一環として、1,610人の非行少年から成る大規模なサンプルを用い、MMPI - Aの尺度レベルの因子構造を検討した。

Morton, T. L., et al. (2002b) は、655人の男子非行少年のMMPI - Aの構造簡約化得点を少年のノーマティブ・サンプルのそれと比較し、(1) 因子2 (未熟性) の上昇が最も特徴的である、(2) 構造簡約化得点の線型結合によってノーマティブと非行少年の両サンプルを識別することができる、と報告した。

Duncan, R. D., et al. (1995) は、少年院に収容された男子非行少年129人の再犯予測に、多数の変数が相対的にどの程度寄与するかを測定するため、因子分析を実施し、施設適応、反社会的行動、知的達成および心理的苦痛の四つの因子を取り出し、再犯を予測しようとする場合には、個々の測度よりも変数の群を調査したほうが、再犯予測に対して有意かつ効果的に接近することができる、と報告した。

Rogers, R., et al. (1994ab.) は、診断システムと精神測定法の双方を含む最近における精神病質のモデルを概観し、司法関係の精神病患者と非司法関係の精神病患者のサンプルを対象に主成分分析を実施し、非司法関係のサンプルでは非行性と不正直 / 不満足、司法関係のサンプルでは非行性 / 物質濫用と不正直 / 抗命の因子を抽出した。

そのほか、Hicks, M. M., et al. (2002) は、83人の男子少年受刑者の規律違反行為を分析し、精神病質者に規律違反行為の発生率が高く、こうした逸脱行為を予測するには、MMPI - Aが精神病質チェックリストより優れている、と報告した。

以上、代表的な研究を7編ほど選定して紹介したが、欧米における最近の動向は、次のように要約することができる。

一つは、MMPI - Aがよく使用されていることである。これは、時代の情況に合わせ、テスト対象者のニーズに積極的に対応しようとしたものである。

二つは、因子分析法が多用されていることである。統計学やコンピュータの発展は、目覚ましいものがあるが、非行性のアセスメントの分野でも、迅速かつ大量に処理しなければならない課題が山積しているのが実情である。

三つは、性犯罪、暴力犯罪など犯罪の種類別の分析が多いということである。非行性は単一なものではなく、例えば、性非行性、暴力非行性といったものを仮定したほうが、非行性の本質に迫ることができることを示唆している。

四つは、精神病理との関連から、受刑者の特異性を分析している研究がいくつかあることである。例えば、幼児を対象とする性犯罪受刑者を分析し、社会病質、情緒障害、重篤な精神病理等の等質の下位集団があることを見いだした研究があるが、これは、精神病理と非行性との関連を明らかし、処遇への新しい手掛かりを模索するものである。

五つは、MMPIに他の心理検査や精神・性的、情緒的、精神・社会的変数などを加え、その解釈の信頼性を高める研究が実施されていることである。MMPIと学校記録を組み合わせ、非行性のある少年の識別力を高めることに成功した研究があるが、このように質問紙法の限界を克服しようとする試みは、歓迎されてしかるべきである。

## 5 総括と今後の課題

我が国においてMMPIによる非行性のアセスメントに関する研究が大幅に遅滞している原因・背景を把握し、打つべき対策を検討することを目的として、この分野における代表

的な研究を概観し、われわれがこれまで何をしてきたかを確認するとともに、特に、欧米における最近の研究動向を調査し、今後、取り組むべき課題と方法論を探求する。

その結果、(1) 高点コードおよびプロフィール分析による研究は、非行性のアセスメントに関して相応の成果を上げてきている、しかし、(2) 非行性尺度の開発は、テスト構造上の限界から停滞している、(3) 他の心理検査や調査記録との関係を分析している、最近では、特に、(4) コンピュータを利用し、特殊な非行や非行少年を対象とする因子分析的研究が増加している、などの結果が得られた。

これらの結果に基づき、MMPIによる非行性のアセスメントに関する研究の今後の課題と方法論を整理すると、次のとおりである。

一つは、非行予測におけるバイアスを除去することである。Hathaway, S. R., et al. (1957) は、非行少年であることが判明すると、関連資料を収集したり、分析する際にバイアスが生じることに気づき、あらかじめ検査を実施し、その後、非行少年になった者とそうでない者とを比較する方式を採用したが、このprediction(事前予測)の方式には、現実には多くの制約がある。やむを得ずpostdiction(事後予測)の方式を採用するとすれば、なるべく客観性を担保し得る調査事項を選定するなど工夫・改善する必要がある。

二つは、非行性を多元的にとらえることである。これは、「問題の提起」で紹介した、Hathaway, S. R., et al. (1963) が非行性を「単一の連続変数」として理解しようとしていることと、一見、矛盾するように思われるが、「単一の連続変数」が複数あると考えれば、よい。すなわち、例えば、性非行の少年には性非行性、暴力非行の少年には暴力非行性が独立して形成される、と考えれば、単一の非行性のもとで身動きがとれなくなっている現状を打開することができるかもしれない。

非行の発現にパーソナリティの要因を無視し得ないとすれば、そして、非行性をパーソナリティの複合概念として理解すれば、多様



なパーソナリティに対応させて多様な非行性を想定することも、可能である。ただし、実際の処遇では、実施の容易性や効率、経済性を斟酌しなければならないので、四つか五つの非行性を準備しておけば、十分である。

三つは、非行性と精神障害の関連を明確にしておくことである。上述したように、非行の発現に果たすパーソナリティの役割が大きい場合、例えば、行為障害や反社会性人格障害と診断された少年にとっては、精神障害の内容と程度が非行のそれと一致し、精神障害の重さと非行性の進度が概念上重複することもある。したがって、仮に、非行性と精神障害を精神病理学的に同一の連続体に配列してみることも、十分に検討しておく価値がある。

四つは、MMPIの欠陥を他の心理検査および/または社会調査によって補完することである。MMPIには、特定の構えや態度をとれば反応を歪曲することが比較的容易であるなど、質問紙法に特有の限界があるので、Archer, R. P., et al. (2002) が実施したように、他の心理検査および/または社会調査と組み合わせ、足りているところは更に足し、不足しているところは補う必要がある。

また、MMPIの解釈の効率・妥当化を促進することも、大切である。Archer, R. P., et al. (2002) は、MMPIの下位尺度間で因子分析を実施し、その構造にメスを入れているが、研究の一つの方向性を示唆するものである。

## 引用文献

- 阿部満州・斉藤正昭 1967 日本版非行性尺度 三京房
- Abe, M. 1969 The Japanese MMPI and its delinquency scale. *Tohoku Psychologica Folia*, 28 ( 1-2 ) 54-68.
- 安香宏・遠山敏 1962 少年非行の早期予測に関する研究 各論 MMPIによる研究 法務総合研究所研究部紀要 11-27
- Archer, R.P., Bolinsky, P.K., Morton, T.L., and Farris, K.L. 2002 A factor structure for the MMPI-A: Replication with male delinquents. *Assessment*, 9 ( 4 ) 319-326.
- Butcher, J.N., Williams, C.L., Graham, J.R., Tellegen, A., Ben-Porath, Y.S., and Kaemmer, B. 1992 *The Minnesota Multiphasic Personality Inventory - Adolescent - MMPI-A : Manual for administration, scoring, and interpretation*. University of Minnesota Press.
- Comrey, A.L. 1958 A factor analysis of items on the MMPI psychopathic deviate scale. *Educational and Psychological Measurement*, 18 ( 1 ) 91-98.
- Clark, J.H. 1948 Application of the MMPI in differentiating A.W.O.L. recidivists and non-recidivists. *Journal of Psychology*, 26, 229-234.
- Duncan, R.D., Kennedy, W.A., and Patrick, C.J. 1995 Four-factor model of recidivism in male juvenile offenders. *Journal of Clinical Child Psychology*, 24 ( 3 ) 250-257.
- 遠藤辰雄・安香宏 MMPIによる非行少年の研究 1960 犯罪学雑誌 26 ( 4 ) 21-27
- Hathaway, S. R., and Meehl, P.E. 1951a *An atlas for the clinical use of the MMPI*. University of Minnesota Press.
- Hathaway, S.R., and Monachesi, E.D. 1951b The prediction of juvenile delinquency using the Minnesota Multiphasic Personality Inventory. *American Journal of Psychiatry*, 108, 469-473.
- Hathaway, S.R., and Monachesi, E.D. 1952 Minnesota Multiphasic Personality Inventory in the study of juvenile delinquents. *American Sociological Review*, 17, 704-710.
- Hathaway, S.R., and Monachesi, E.D. 1953 *Analyzing and predicting juvenile delinquency with the MMPI*. University of Minnesota Press.
- Hathaway, S.R., and Monachesi, E.D. 1957 The personalities of predelinquent boys. *Journal of Criminal Law, Criminology, and Political Science*, 48, 149-163.
- Hathaway, S.R., and Monachesi, E.D. 1961 *An atlas of juvenile MMP profiles*. University of Minnesota Press.
- Hathaway, S.R., and Monachesi, E.D. 1963 *Adolescent personality and behavior. MMPI patterns of normal, delinquent, dropout, and other outcomes*. University of Minnesota Press.
- Hicks, M.M., Rogers, R., and Cashel, M.L. 2000 Predictions of violent and total infractions among institutionalized male juvenile offenders. *Journal of the American Academy of Psychiatry and the Law*, 28 ( 2 ) 183-190.
- Mack, J.L. 1969 The MMPI and Recidivism. *Journal of Abnormal Psychology*, 74 ( 5 ) 612-614.
- Morton, T.L., Farris, K.L., and Brenowitz, L.H. 2002a

- MMPI-A: scores and high points of male juvenile delinquents: Scales 4, 5, and 6 as markers of juvenile delinquency. *Psychological Assessment*, 14 (3), 311-319.
- Morton, T.L., and Farris, K.L. 2002b MMPI-A: structural summary characteristic of male juvenile delinquents. *Assessment*, 9 (4), 327-333.
- 大崎サチエ 1970 青少年の人格的特性に関する研究 MMPIによる非行少年の人格的特性について 熊本大学教育学部紀要 第二分冊 人文科学 18 139-144
- 小野直広・進藤眸・片岡義登 1968a MMPIによる非行性の検討(その1) 総論 日本心理学会第32回大会発表論文集 411
- 小野直広・進藤眸・片岡義登 1968b MMPIによる非行性の検討(その2) いわゆる「非行性尺度」による検討 日本心理学会第32回大会発表論文集 412
- 小野直広・進藤眸・片岡義登 1968c MMPIによる非行性の検討(その3) コード・パターンによる検討 日本心理学会第32回大会発表論文集 413
- 小野直広・片岡義登・進藤眸 1969 MMPIプロフィール分析に関する基礎調査 その1 ノーマティブ・データ 犯罪心理学研究 6(2) 60-66
- 小野直広・進藤眸・片岡義登 1970 日本版青少年編 MMPIアトラス プロフィール分析の手引き 三京房
- Ono, N. 1980 The characteristic MMPI profile patterns of youthful Japanese delinquents. *Tohoku Psychologica Folia*, 39 (1-4), 105-112.
- 小野直広 1981 MMPIからみた我が国非行少年の特性 犯罪心理学研究 17(1・2) 1-11
- Peña, L.M., Megargee, E.I., and Brody, E. 1996 MMPI-A patterns of male juvenile delinquents. *Psychological Assessment*, 8, 388-397.
- Rogers, R., and Bagby, R.M. 1994 Dimension of psychopathy: a factor analytic study of the MMPI antisocial personality disorder scale. *International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology*, 38 (4), 297-308.
- Shealy, L., Kalicman, S.C., Henderson, M.C., and Szymanski, D. 1991 MMPI profile subtypes of incarcerated sex offenders against children. *Violence and Victims*, 16 (3), 201-212.
- 進藤眸・小野直広・片岡義登 1969 MMPIによる非行性の検討(その4) 尺度間因子構造との関連性からの考察 犯罪心理学研究 7(特別号) 12
- 進藤眸・片岡義登 1970a MMPIによる非行性の検討(その5) 尺度間因子構造との関連性からの考察(2) 日本心理学会第34回大会発表論文集 498
- 進藤眸・小野直広・片岡義登 1970b MMPIプロフィール分析に関する基礎調査 その2. プロフィール・コード型とパーソナリティ特性との関連性 犯罪心理学研究 7(1・2) 14-20
- 進藤眸・小野直広 1972 MMPIプロフィール分析に関する基礎調査 その3 因子分析による非行性への接近 犯罪心理学研究 9(2) 75-82
- 遠山敏 1962 非行少年に対するMMPIの研究 四国矯正科学 16 32-38
- Wheeler, W.M., Little, K.B., and Lehner, G.F.J. 1951 The internal structure of the MMPI. *Journal of Consulting Psychology*, 15, 134-141.

## 要旨

この論文は、我が国における近年のMMPIによる非行性のアセスメントに関する研究の遅れを取り戻すことを目的としたものである。MMPIによる非行性のアセスメントに関する日本語および英語の文献、特に1990年以降に発表された英語の文献を、高点コードの分析、非行性尺度の開発、プロフィール型の分析および因子分析法の適用の観点から概観する。

上述の文献を概観して得られた若干の発見に基づき、MMPIによる非行性のアセスメントに関する研究は、今後、次の四つの方法論上の問題を十分に検討した上で実施されるべきである、と結論する。

- (1) 非行性に関する資料を収集し、評価するに当たっては、バイアスを除去すること
- (2) 性非行性、暴力非行性などといった各種の非行性がある、と仮定すること
- (3) 非行性と精神障害は精神病理学的に同一の連続体に配列される、と仮定すること
- (4) MMPIの欠陥を他の心理検査および/または社会調査によって補完すること